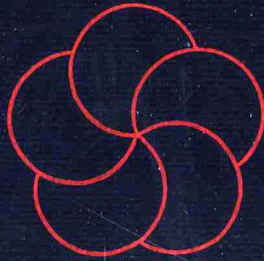
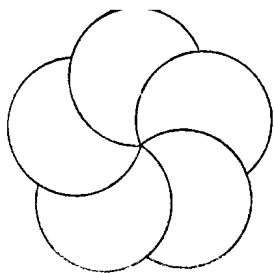


1

日本文学の歴史



神と神を祭る者



1 神と神を祭る者

日本文学の歴史

小林行雄 池田弥三郎 角川源義 編



.....し一取一編.....



4

日本文学の歴史 (全12巻)

第1巻 神と神を祭る者

昭和42年5月10日 初版発行

定価 650 円

編者 小林 行雄
池田 弥三郎
角川 源義
発行者 角川 源義

印刷所 中光印刷株式会社
製本所 株式会社 鈴木製本所
製版所 株式会社 高木写真製版所
発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13
振替東京195208番
電話東京(265)7111番

© Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

目次

序章

日本の風土 自然と文学

大倭の夜明け^{やまと}

村君の世界 ムラの発展 ムラの信仰 海の常世神 死の国と柔土の国 常世への願望 山の常世神 市と歌垣 歌垣にまつわる話 歌垣の変貌 古代の倫理 天つ罪と国つ罪 村の芸能 饗宴と芸能 朝貢芸能 卑人舞の起源 卑人舞の朝貢

原始のころと造型

文学の源泉へ 蛇形の装飾 土偶と石棒と 菰の風習 銅鐸の絵物語 銅鐸はかたる 埴輪のころ 人馬の埴輪の登場 石製祭器の奉獻 直弧文のいのり 壁面の世界 須恵器の小像 やつへぐい

古代人へのイメージ

古代人へのイメージ 先住民族はアイヌか 原日本人説 日本人はみな同じか 先土器時代人の

登場 槍と弓矢と 縄文式土器の出現 稲作の始まり 金属器の導入 国産の青銅器

ムラからクニへ

女王卑弥呼 三世紀のヤマト 同範鏡の追跡 銅鐸の終焉 古墳の出現 神宝の放棄 ひろがる
国産宝器

大古墳の時代

古墳の変貌 横穴式石室の採用 乗馬の風習 金銀へのあこがれ 倭の五王 南朝の鏡 日向と
吉備と東国と 蝦夷とは 熊襲と卑人 帰化人の功績

村の語部・国の語部

語部の発生 かたりの原型 日継の管理者 氏族の語部・国の語部 しい語り あま語り 海女
の伝承

日本語の母郷

語りのことは 日本語列島 単一言語の国は珍しい 基層言語はあったか 地名伝説と下積み言
語 神話と言語 古代の共通語 書かれざる文語の様式 語頭の濁音 日本語の非アルタノ的特
徴 『魏志』倭人伝に見える日本語 古代シナ語の浸透

言霊の国

村君と巫女 神の詞章 言霊の幸はふ国 精霊に呼びかける 言挙げせぬ国 詠の発生 詠から
枕詞へ 歌物語と諺物語

うたの誕生

「歌う」と「訴う」 片歌の問答 片歌問答と筑波の道 高佐土野の妻問い問答 片歌から旋頭歌へ 旋頭歌形式の自覚 歌の定型化 片歌形式の膨張 反歌の独立 連歌・俳諧の発生

一六

古代のうたのころ

うたの古い姿 旅の夜のうた たむけのうた 鎮魂のうた まじないのうた 桜を惜しむうた 恋の招魂のうた 挽歌のころ 国見のうた くにぶりのうた 宮廷詩の成立 儀礼のうたから創作のうたへ

一八

うたの饗宴

うたの展開 直日の神のうた 祭りと文学 祭りの季節 冬祭り・春祭り 国見の春 国見から朝賀へ 祭りとうたげ

二三

神々の詞章

なぜ祝詞をよむか 祝詞の実体 寿詞は服従と祝福のことは 出雲の神賀詞 中臣の寿詞 斎部
の祝詞 祝の古い意味 神を祭るもの 中語と神主 宣命の変貌 宣命の作者たち 帰化人の寿
詞

二四

鎮魂のあそび

磐余の池の話から 池のあそび 盃に散る花 島の宮・勾の池 放ち鳥の歌 鳥のあそび あそ
び・あそぶの古義 遊部の話 儀礼としての遊舞 天の銅女の命のあそび 俳優の始まり 俳優
豊田彦 芸能伝承の位置 芸謡から歌謡へ 旅人の芸能

二五

神話のふるさと

二六

失われた神の姿をもとめて 狩猟民族的な世界像の喪失 神々の誕生 火の神の誕生 作物起源の神話 焼畑耕作民の神話 穀霊の逃亡 餅的モチーフと天の岩屋 天父・地母の神話 離婚の神話 ポリネシア神話とのつながり 皇室神話のふるさと 神話伝承の重層 呪術的想像の産物 二重構造の幻想 再解釈以前

遍歴する英雄神

三四

英雄神とその時代 すさぶる神 須佐の男の原像 須佐の男はまれびと神か 英雄神の担い手 大国主の原像 出雲びとの世界 日本武尊の虚と実 英雄物語の変貌

帰化人の神話

三四

天の日矛の伝承 神妻の孤独 帰化人たちの聖具 刀剣文化をもたらしした人々 日矛の鎮魂と岩戸神話 常世の命を求めて 春のおとずれ

神話結集前後

三五

日本神話の年輪 神話伝承の統合 久米の子のうた 猿女の君の伝承 口承による神話の統合 熊野の信仰 文筆による神話の改作 加筆・潤色の痕跡 宮廷神話の地方化 「風土記」の神々 出雲神話の舞台裏 虚構の出雲神話

神々の変貌

三七

古き神の受難 神と民衆との対決 自然神の没落 ある自然神の転生 神秘から人間性へ 伝承の生存競争 ゆらぐタブー 伝承と異国文学の接触 新渡来の発想

まぼろしの豪族和邇氏

四〇〇

和邇のふるさとをたずねて 和邇は野 二つの和邇系譜 なぞの日子坐の王 四つの結婚 水べで戦う和邇氏 日本武尊は和邇氏の英雄 たけるべの分布 和邇伝承の神功皇后 難波の和邇氏 大山守の命の反乱と死 佐保姫の悲話 物いわぬ皇子 蟹舞のうた 蟹舞の道をたどって 蟹の姫の物語 志都歌の歌がえし 歌曲をうたう和邇氏 和邇氏の鎮魂法 もののべ鎮魂と和邇氏 荒ぶる御魂 和邇氏の製鉄工場 ほろびゆく和邇氏 『古事記』作者のふるさと 語りのテヤストと読む史書と

倭は国のまほろば

四〇六

歴史の流れ やまとの発展 倭は国のまほろば 英雄賛歌への転用 宮廷にはいる歌謡 歌と政治と 伝承物語の変形 失われる文学の香り つくりかえられる人間像 政治に従属する文学 神話の政治的構成 『古事記』各巻の政治的段階

参考文献

四七三

日本文学年表

四七四

あとがき

四八二

執筆者（五十音順）

池田弥三郎	大林太良	亀井孝	鈴木棠三	益田勝実
上田正昭	岡野弘彦	倉林正次	直木孝次郎	松前健
白田甚五郎	角川源義	小林行雄	西村亨	三品彰英

本巻協力者

岩野俊夫	坂本万七	檀上重光	沼沢喜市	藤森栄一	水野正好
江坂輝弥	杉原莊介	坪井清足	野口義磨	堀内民一	三村幸一
岡崎敬	高橋猪之介	坪井洋文	芳賀日出男	堀江聡男	森貞次郎
小野重朗	田中琢	中西進	萩原秀三郎	三木文雄	山田隆治
近藤喜博	田辺昭三	中村孝三郎	藤本四八	三隅治雄	
茨城県立博物館	京都国立博物館	京都大学文学部	共同通信社	九州大学文学部	慶応義塾大学
神戸新聞	滋賀県教育委員会	芝山はにわ博物館	水産航空	世界文化社	東京国立博物館
学人類学教室	東北大学文学部	長岡市立科学博物館	名古屋大学文学部	奈良国立文化財研究所	文
化財保護委員会	平安高等学校	平凡社	明治大学考古学研究室		

神と神を祭るもの

古代大倭郷



序 章

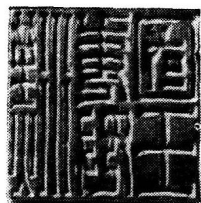
日本の風土

わたくしたちの祖先は、日本列島とよばれるこの島国の海山のあいだに、流れ寄るように住みついた。日本の特殊な風土条件は、日本人の自然観を深めさせ、詩歌の花を咲かせた。短歌や俳句とよばれる短詩型文学の作者であり、鑑賞者である人々が日本の全国に存在し、階層のいかんを問わず、文学の担い手であるという事実は、世界のどの国にも見られない。それでは日本人に自然感情を深めさせた、日本の風土とは、どのようなものであったろうか。

日本人なら誰でも知っているように、日本はアジア大陸の東縁に位置し、ほぼ南北に長く弧状をなす列島である。この列島は北緯二四度から四六度のあいだに

延びており、南北両端の緯度のひらきは、広大な中国の長城線以南と比べても大差がない。しかし長さ約一〇〇〇キロメートルにわたるとはいえ、その幅はせいぜい二、三百キロメートルにすぎぬから、土地の面積はきわめて狭く、三八万平方キロメートルばかりである。

世界地図をひらいて、もう少し詳しくながめてみよう。まず、この日本列島は単純な一つの弧とばかりはいえないということに気づくであろう。すなわち、日本列島の中心にあたる北海道から九州までの部分を本州弧とよべば、それにしたいて、北方には北海道を交点として、カムチャツカ半島にのびる千島弧と、樺太につらなる樺太弧とが分岐している。南方には、九州



美しい日本列島

四囲を海にかこまれ、四季のうつろいも変化に富んだ日本。しかし、ジェミニ衛星船が超高空からとらえた日本は、平板で、地形模型をみるようだ。この写真には、ちょうど伊勢湾から御前崎あたりまでが写っている。点々とある白班は日本列島上空に浮かんだ雲である。



から台湾につらなる琉球弧が存在する。さらに本州弧の中央部から伊豆七島を経て、マリアナ諸島につらなる七島マリアナ弧もまた、日本列島の形成に一役をになっている。

そこで、洋上に点在する島々を飛石づたいにつないだ見方から一步をすすめて、かりに太平洋の海水をとりのぞいてみると、どういうことがわかるだろうか。

北西太平洋の海底を基準にしてながてみると、日本列島は高さ数千メートル、長さ二〇〇〇キロメートルに及ぶ大山脈の頂部に相当するということになる。

いま日本列島を一つの大山脈にたとえたが、この山脈は長年月にわたる造山活動によって形成されたものである。しかし、たとえば一億年というような、非常に長い尺度ではかってみると、日本列島はまだ若い山脈といわねばなるまい。なぜかという、この造山活動はまだ終わっていないからである。そして地震と火山活動とは現在も継続し、頻発している。たとえば、日本にある約二百の火山のうちで、なんらかの形で活動しているものは四十五もあるといわれている。このような日本列島の若人にも似た粗暴さは、この風土に

もえいする国

桜島と阿蘇山、さらに浅間山と、いまも噴煙をふきあげている活火山が、この日本列島にはずいぶんと数多い。火山、それは生きている大地の、力強い生命の躍動であり、若々しさの主張である。



住む人々にどのように影響したであろうか。地震はときには、津浪という現象をとめない、どこかの海辺を襲っては、多くの人畜家財を失わせている。

火山活動による複雑な地形は、山脈や河川を入り組ませ、細かく区分された地形的単位によって、古代には小国家を乱立させ、封建時代には、大名小名を割拠させ、近代では小都市を地方に発達させた。このような地形は漂泊的な民族の習性には適しなかったから、むしろ民族を土着させる傾向をもったであろう。

火山の存在がわたくしたちの生活のうえに与えた影響は、威圧的なものだけではない。火山はしばしば女神に見たてられている。日本の山水美は火山によるものであり、火山の噴出は植物界をおびやかす土壌の老朽化にたいして回復の役割を果たしてくれる。日本人は自然による恩愛と暴行の二つを従順に受けねばならなかった。西洋文化は自然を征服することによって成立したが、日本文化は自然に従順であることによって発達してきたのである。

自然と文学

アジア大陸と太平洋とのあいだに位置する日本列島の気候は、その両者によ

大和の野と山

蜿蜒とつづく山なみにかこまれた大和盆地は、日本のふるさとである。日本の国の歴史が、豊かな大和の土壌から生まれたように、文学もまた、美しい大和の自然のなかで育った。小ぢんまりと整った容姿をみせる耳成山、その向うに三輪山が、かすんでみえる。



って強い影響を受けている。すなわち、冬は大陸から寒冷で乾燥した北西季節風を受け、夏は太平洋から高温で湿潤な南東季節風を受ける。前者は裏日本におびただしい積雪をもたらし、後者は台風として知られる熱帯性低気圧を生みだし、多量の降雨をともなっており、年ごとに列島を席卷する。

春と秋とには、大陸と太平洋との二つの気団の境界に生じた前線が、日本列島の付近に停滞して、梅雨となり、また秋霖しゅうりんをもたらす。こうした雨による水源は日本の風土に農耕社会を発達させ、現代では発電事業に適した条件となっているわけである。

日本風土の四季おりおりの変化の妙は、農耕や漁獵などを営む人々を、自然の変化に対して敏感にさせた。季節の変化を無視しては生業は成り立たないのである。「春一番」という言葉は、近年の新聞やテレビを賑わしているが、もとはといえば、海岸の漁業民の生活実感であった。古代人は月の満ち欠けに自然の暦を発見して、農耕の時期を定めていた。

日本の気候には、大陸的な要素と海洋的な要素が複雑にまじり合い、周期的季節的循環のほかに、不規則



筑紫の海に浮かぶ島 日本は、大小数多くの島々からなる。その多くの島は、それなりにさまざまな歴史を秘めている。博多湾に浮かぶこの志賀島は、原始から古代への激動の中で、大陸・朝鮮につながる門戸として、かつては、主要な歴史の舞台であった。「漢委奴国王印」が出土したことで、よく知られた島である。

で急激活発な交代がある。雨の降り方だけでもいろいろで、それを区別する名称が、多様に分化しているのも、日本だけといってよいだろう。たとえば「菜種梅雨」^{ななづめ}「春雨」^{はる}「走り梅雨」^{はしり}「五月雨」^{さみだれ}「夕立ち」^{ゆふだち}「秋時雨」^{あきしぐれ}「露時雨」^{つゆしぐれ}「初しぐれ」^{はつしぐれ}「寒の雨」^{かん}などを翻訳すると、どうであろう。かりに翻訳しえたとしても、わたくしたちがこの季節の雨にいだいている生活感情を伝えることができないであろうか。

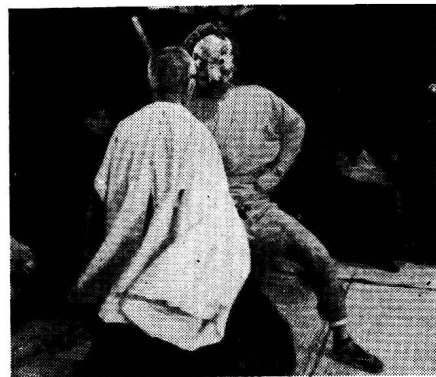
詩人科学者・寺田寅彦は短歌俳諧にあらわれる自然の風物と、それに付随する日本人の感覚の、最も手近かな目録、あるいはインデックスとして俳諧歳時記があるといっている。日本人の生活感情や生活事情、または倫理感や美意識が、わずか五音内外の季節として、日本人の詩歌を育ててきた。このことはながいあいだわたくしたちの祖先が風土の文学をうたいつづけてきた結果、呪言のように短い詞章のなかに煮つまった詩情を結集することを可能にしたのであった。

日本の文学を生みだした環境について、以上のようないちおうの知識を整理した上で、できるだけ古代にさかのぼって日本文学の発生を考えてみたいと思う。



③ ↓

① ↑



精霊 精霊は神とよぶにはまだ靈魂の不完全な、したがって神の世界にも行けず、人間界の周辺に常時うろついている靈的存在である。長野県の遠山地方では、部落のまわりの山野にいろいろの精霊が住み、ときどき祭りをしてやらないといたずらをしたり、たたったりする。そこで、霜月祭の場に招いてこれをもてなすのだと伝えている。四面（よおもて）はその精霊をかたどったものだ①。同じ長野の新野の雪祭や坂部（さかんべ）の冬祭、静岡県の西浦（にしうれ）の田楽祭に出る鬼形の仮面も同じく精霊を象徴したものであった②。村人の考えでは、山野に巣くうこれらの

精霊たちは荒ぶる魂の持ち主で、何かにつけて神にあらがい、人にたたる。そのため祭りの時にこれを招いて、神をうしろだてに村の禰宜が精霊を説得して、村にたたりをしないことを彼らに誓わせるのである③。また御霊（ごりょう）信仰の勃興から、この世に恨みを残して死んだ人間の霊を精霊とみる考えが生まれ④、遠山の霜月祭のように、鬼形の面と並んで怨霊の仮面が祭りの場に登場して村人のもてなしを受けることも行なわれた。また獅子や駒などの動物も、神秘的な霊を備えた一種の精霊と見なされ祭りの場に招かれて服従を誓わせられることもあった（⑤・⑥・⑦）。